

H-16

寺田福壽述

人生の目的

發行所

哲學書院

附言

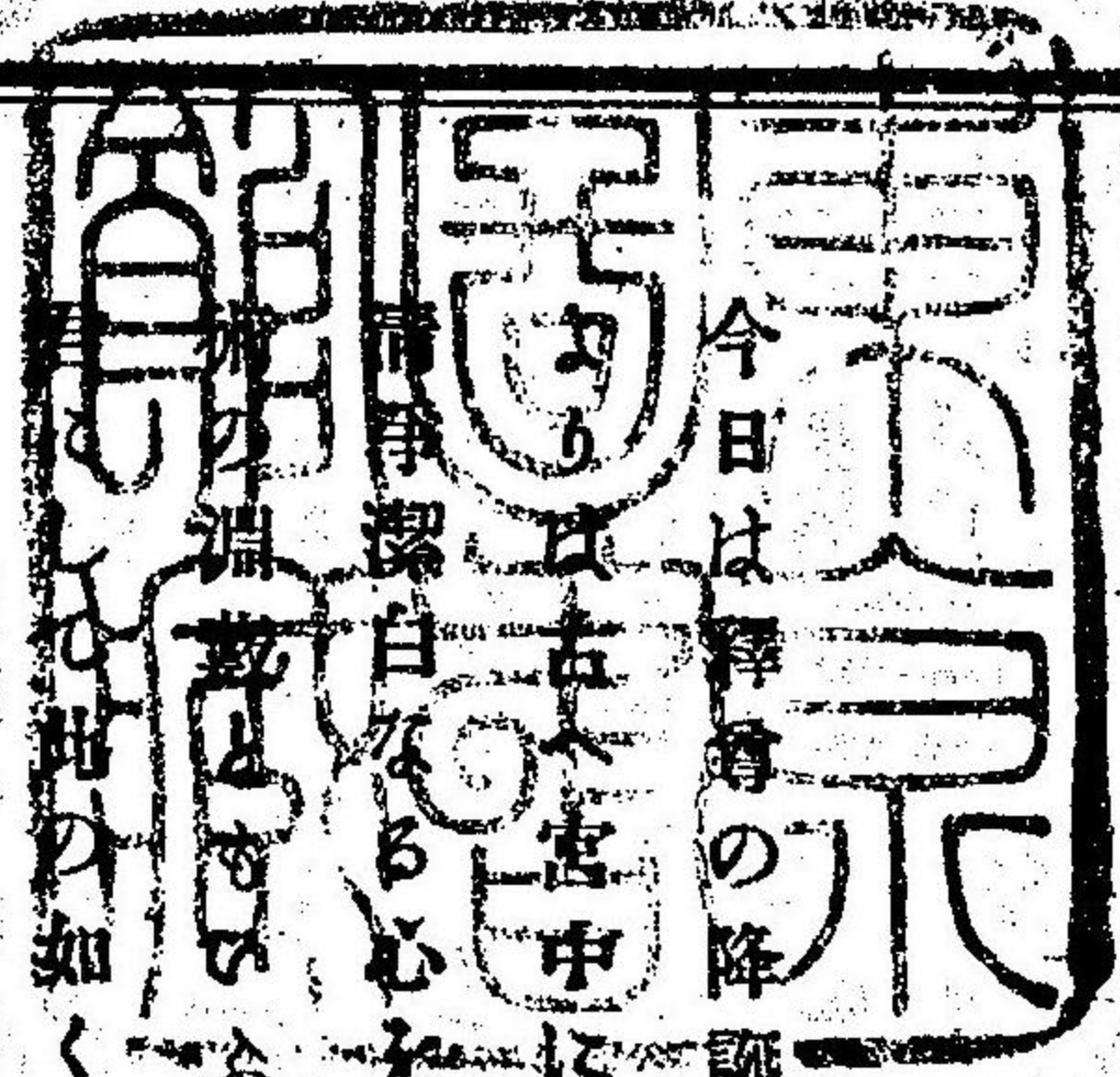
此書は善惡標準といへる愚著の大意を一席の演説に造りて明治廿六年四月八日帝國大學、高等中學、慶應義塾、專門學校、哲學館の有志學生諸君が釋尊降誕會を東京帝國大學講義室に於て開かるるに付其あらましを述べしことなり併し之れは公開演説の席上にて至極通俗に辨したることなれば別に題目を設けて人生の目的と名けたり實の人の行ひに於ける善惡の目安、手本、目的といふ程の意味なり詳細の近々出版する善惡標準に就きて研究せられたることあり

寺田福壽記

人生の目的(善惡標準の大体よつき通俗演説)

寺田福壽

佃次内筆



今日は釋尊の降誕日なりとて寺々も甘茶を澤山施す日なるか昨年より古くも世の中に於て灌佛會を始めて行はせられたるか如く誠に清淨潔白なる心を以て文明の道理の世界たる我日本帝國に於て學問の淵藪とすべし公べき公立私立共に最高等なる五大學校の學生諸君に於て如く施本(昨年は宇宙の光今年ハ御國の光を)までせられて眞實に道德實行の標準とならるることば此上もなき美學にして我々も文明の光と國の光と佛の光と一光三尊となりて世界を照

す光の益明なるを喜ぶこと極りなしと申さねばならん實に徳孤ならざるの道理か古への灌佛會に相和して近松門左衛門は釋迦如來誕生會といふ脚本を出して芝居を興行せしめしことありしか如く昨年の諸君の美舉に相和して當年の本郷の春木座の芝居にて兩三日前より釋迦八相記の下題を演し昨年諸君か施本せられし宇宙の光を殊更印刷して施本することとなり役者自ら演藝中に花を散らすか如く撒き散らす様子あり諸君の徳義は遂に芝居を助けて世人を樂ましむるに至る其實際に世間を利益せし一端を擧ぐるも此の如し加之當年は芝の青松寺に橋場の總泉寺に於ても其外所々に此誕生會と祝する大演説あるに至る其功亦大なりといふべしそれ成就きては拙僧も其道德の標準たる善惡の標準即ち人生の目的ともいふべき演題を掲げて諸君の美舉を賛成せんと欲するなり

○ さてこの善惡標準といふ演題は、我々人間が之を手本として、銘々に道徳修身といふ善き行を實地に行ふについて、茲に目安を定めるので、此目安の通りの行とする様になれば、夫を善人といひ、此目安に背いた行をする様にあれば、夫を惡人といふので、之が人と生れたもの、一番大切な目當とあるのである。此的標にはづれ、最早体の人間でも心は人間であり故人は之を最後の目的と定て、之に背かす之に準して行かねばならぬといふ話であります。

ところが、此目安のどんな者でも人間であらん限りの者ならば、だれでも其目安といふは、あのことなりと、合點承知の出来るものでなければならぬ、そうでなければ、無學な者や女子供は、善き行は出来ぬ様になるそこで、此目安を定るに付て、極々六ヶ敷高尙なる議論を用るは誤りに

して、我々銘々が日夜見聞する、極々手近な所で話をせねばならぬ筈であり、
 あります、それ故、唯今は極々たやすく、一口に話をして、たれでも分る
 様に致したいと存じて、此話をするのであります。
 さりながら、此事をそんなに分り安く、一口に話をしやうと思へば思ふ
 はどその話に誤りがありてはならぬ、澤山の議論をならべて話する時
 は、少し位間違がありても、あれやこれやの言葉で喰止て、大間違にはし
 ませぬが、一口や二口の言葉に間違がありては、丸切り大間違にありま
 す故、之を一口に話そうといふには、よくよく取調べ吟味をつくして、極
 々六ヶ敷所の大議論すなはち、佛教なれば八家九宗、支那なれば孔子、孟
 子、老子、莊子、西洋なれば澤山の哲學者なとの、夫々の奥の手の話をよせ
 集め、なほまた世界にありとあらゆる道理や物事を細かに吟味した上
 で、扱其たつた一口や二口に話したことを、そこへ持出して、夫を證據立

て、此の點より調べても此通りなり、彼の説から考ても此通りなりと、種
 々のとを并べ立てた後に、何程六ヶ敷吟味としてみても、つゝまる所は
 これ丈けのことなりと、つゝめあけて見せねばならぬ話である故、拙僧
 は、とても充分の事は、自分の思た丈けも取調べられなんだ故、況して世
 間の學者方から見られては、物笑ひの種子であるふとは存しましたれ
 ども、實は多年來心掛けて、昨年一月より九月までかゝつて善惡標準と
 いふ本を一冊書てみて、其後は拙僧の常に御親しく願ふ方々八九名の
 人に、内々讀でみていた、いいて此後もまだまだ澤山の御方々へ見ても
 らひたいと思て居る事でありすが、そこで拙僧が六ヶ敷方で調た事
 はその本一冊にあらましを書て置きました、が、さてその本で調べあけ
 て、そんなことがつゝめあがつたかといふに、之を此席で一寸分る様に
 一口にさへは、

人は互に程善く交て

人をそらすなかれ

といふ一言に納ります

そこでその一言と今少し詳しくいへば、我々人間が善き行をするといふても、外の事ではない、此一言の目安を誤らず、親子兄弟夫婦の一家の交りにもせよ、世間の朋友知己并に初面會の人々に交るにもせよ、互に程よく交りをなせば、夫でよいので、程よく交りとなすといへば、その交をして居る間、善といふこともなければ、悪といふこともありません、只其程よく交るのがそのまゝ、そつくり善にして、程の好くないやうになるのがそのまゝ、悪といふことになり、されば其程の好いといふ、どうしてどんな心持になれば、そうなられるのかといへば、之又一口にいへば、無我平等心になりて、和合一致せよ

といふより外はありませぬ、又之を少し六ヶ敷いへば、主観上より考て演繹的に話すれば、他人と同心同体となり、自分の無我無心となり、他人と自分を平等に見做して交るを、善き行ひともいひ、程好き交りともいひ、當時の流行言葉に公平無私ともいふなり、又客観上より考て、歸納的に話すれば、他人と協力一致して、自分の合体不離となり、他人と自分とと和合し、相愛して交ると、善き行ひともいひ、人をそらすぬともいひ、當時の流行言葉に和衷協同ともいふなり、是等のことをまゐめて、その本の中に、善や悪と比ひ較べせぬ、全き善といふことで、絶待善と名けました。

それ故、一家にもせよ、一國にもせよ、何事によらず、かうゆう風に同心和合して、日夜の交りをなし居れば、其一家一國の中では、此外に善とか悪とかいふことを言ふにも及ばず、見るにも及ばぬ、譯で、そうゆう風にな

れいたどひ何として善にして更に悪の面影を見ることはならぬ様
 になります、そこで若しその中に少しでも悪ありといはば其はその間
 に和合同心せざる所のあるその部分をいふのであります、我が思ふと
 と他の望むとと和合一致して居る上、たどひ悪を爲とも善となりま
 す、之を佛教では煩惱即菩提と申して、仁王經の中には菩薩未だ成佛せ
 ざるどきの菩提を以て煩惱となし、已に成佛する時は煩惱を以て菩提
 となすと申してあります、之を例せば、男女七才にして席を同ふせずと
 まで八ヶ間敷支那の禮もあれば、男女のあまり親しき、人呼で悪しき
 行ひと申します、去りあがら婚禮の式を濟して、一家一族の一致せし上
 は、何程その男女が親しくしても、悪しき行にはあらずして、親しくせば
 ればむつまじからずとして、人却て之を悪しき行といふ(夫婦別ありと
 いふは、親しくならせる爲めの教にして、睦じくすべからずといふとに

いあらず)ではありませんか、されは人が一致すれば、悪も變じて其儘善
 となりませす。

そこで其一致が何處にも何事にも及ぶ様になれば、夫が極樂世界にし
 て極善最上之れほど結構なことはなけれども、中々人間世界がそうは
 ゆかぬもので、その一致が一家に止るとか一國に及ぶとか、其事柄によ
 り其場所柄によりて、種々の差別が出来て来て、何にから何にまでも皆
 な一致するといふことは六ヶ敷なる、さればその一致が一家一事に止
 まれば、その一家その一事丈は善なれども、其他の事其他の家に及ば
 されば、其及ばざる所に、不一致といふ悪が出て来る様になる、尙又其及
 ばざる所といふにも、大小多少、輕重廣狹といふ差別が立て来て、廣く一
 致するのは善の方へ近附くのなり、狭く一致するのは善の方へ遠ざか
 りて悪の方へ近附くの故、此時は善といへども、此の善の悪と比ひ較

十
べのある善となりて、全く比べのなき絶待善との違ふ故、此の狭く
少く軽く小さき一致や、又たどひ廣く多く重く大きい一致たりとも、そ
れが比べ較べのある間、之を相待善と申します。
ところが、たとひ大小多少輕重廣狭の差別はあるとも、皆な悉く全く差
別するといふとは無い、少しの一致し和合するともあるゆへ、その少し
の和合一致を、段々多く和合一致させるのが、道德宗教政治法律の務め
にして、是等のもの、力らをかちて、少しづつ、でも一致に近寄るのと善
が(相待善)積めたりといひ、少しづつ、でも和合に遠ざかると悪が(相待悪)
勝たと申します、例せば物を盗むは悪なれども、一家心を合せて盗むと
き、他の家への非常なる悪なれども、其一家に取ては善とある、他國を
奪ふの自國の外へ對しては悪なれども、自國へ取ては善となる、去りあ
がら其他國を奪ひしが爲に、世界中平穩になりて、反て治り易くなれば

それは奪ふ方が善となります、併し今の有様では、先づ今のなりで之と
一家も一國も五大洲も一致して和合し居るといひねはならぬ故、之が
即ち善である、夫故其善ある一致を破る所の盜賊の行や國を奪ふ行ひ
は、之を惡といひねはならぬ、但し此一家と一家との附合ひや、一國と一
國との交際は、一人と一人との交りよりの別なるもので、一家なれば主
人と主人との附合ひ振り、一國なれば國主と國主との交際振りありて
之には色々の順序段階がありて、一家なり一國なりが相待で其内輪を
一致した上にて、主人國主が外に對して絶待に一致するといふ様に、其
風儀には變りあれども、其元はやはり一致といふことになります、さす
れば相待とか絶待とか種々六ヶ敷話もあるかなれども、一致が善じや
といふことは、動すへからざる道理となります、去りなから此外に、一致
するでもなく一致せぬでもなき、善とも惡ともいはれぬものありて、之

を佛語では無記とも捨ともいふことなれども世間での無關係で一向分らぬゆへ何ともいふて見様のあい人じやといふともありまた善人でもなし悪人でもなし先づ人并じやなといふともあれども人并なればそれは善人の部なりまた無關係にて分らぬ人ならば之は知らぬで名のつけ様がなひといふまでのことなれど丸切り世界中に關係のない人といふもある筈でない故若し關係ありて分たすれば其分たといふ人と一致して居るか居らぬかは分る筈なれ其人は必ず善人か悪人かでなければならぬそれでもまだ善人とも悪人ともいひれぬ一致して居るとも居らぬとも定められぬといふ人あらば其人は阿房か馬鹿か狂人かでなければならぬ筈じやと思ひます若し阿房でも馬鹿でも狂人でも無ければ其人は善人か悪人であるに違ひないのですそれ之を考へ合せてみても益々一致和合が善じやといふとが分りま

す。

さてそこで若し右の如き次第のものとするれば少しでも相争ふことばならぬ道理で一人が右に行かんとするを一人が左に行かんとするは悉く悪にして他の一致せざる悪を責めることもならぬ乎といふに決して然らず此一致せざる悪は一家なれり一家中打寄て責め一國なれば一國打寄て責め平げねならぬ之を一家なれば家制といひ一國なれば國政といひ世界中なれば萬國公法と申しますまた夫迄には至らぬ中に程善くするを宗教道德と申します。去りながら茲に一致を嫌ふでなく此上もそつと好く一致したいといふ爲に相争ふことありて一家和合の爲に家人相ひ争ふことあり一國和合の爲に人民相争て政治宗教等の議論をなすことありて寧ろ平生は此争の方が多ひといはねはならぬが之の如何かすへきやとい

ふに、其時は一家にもせよ一國にもせよ、多數に隨て一致せねばならぬ。それい何故ぞとなれば、多數に隨へば總体を一致すると易きが爲であります。然るに其多數に順て一致することも、中々面倒なことの有勝ちなものゆへ、茲に此面倒を除く爲に、一家なれば親の命令とか、戸主の命令とか、一家の家風とかいふものを持出し、一國なれば君主の命令とか、其國の習慣とかいふものを持出して、一致し易ひ様にするのである。ところが其戸主や君主が自分の命令を以て一致するといふことも、出来ぬでいなけれども、又々随分面倒の起り勝ちなもの故、そこで一家相談とか一國議會とかいふものと設て、夫を滑かに一致せしめんとするのであります。

されば一致の外に人間の目的のないのであります。その一致の爲に相争ふことの避けかたき順序であるゆへ、或の相争ふとたとひありと

も、其争は一致の爲の争であるといふことと、銘々の心に於て忘れざれば、其争や君子にして、其事の善悪(相待の善悪なり)如何に關せず、一致といへる大目的(絶待善なり)に背かぬ様にせねばならぬ。又自ら争ふ所の一致論(相待善なり)の行いれざれば、とて必ず心持を悪くせず、相變らず。和合一致を破らぬこそ妙なる所にて、其が自分よりいへば無我同心なる有様で、多人數よりいへば和合一致なる有様である。言葉を換ていへば、大体の所と大切に於て、一部分を忘れるのであります。

そこで右の如く、澤山の人々と總ぐ、りにして一致させよといふ風に、工風する(歸納的なり)政治法律の務でありて、之は随分やかましき話であるが、夫いやかましうなるも道理で、此方では充分自分の心に満足せざることも、多數の壓制で止むことを得ず、一致せねばならぬ様になります。其代り多人數持合ひの話でありますから、樂な所もありません。

ところか宗教道徳の話、政治法律の話とは違ひまして、自分の一人であ
 りて、澤山の他の人々に自分の方から一致する方の工風を運らさね
 いならぬのであります。(演繹法あり)そこで此方での多くの人々を自分
 一人に引受て、他人はどうかであらふとも、他人の如何に係らず、自分だけ
 は自ら無我無心となりて、多くの他人の心に一致して、和合する様にせ
 ねばならぬので、此の時は他は千萬無量に分るゝとも、自分の心の一
 にして平等となり、平等なる故他人数の多岐に分るゝに任せて自分の
 心も多岐に分るれども、分れた自分の心の同心平等にして更に變るこ
 となく、他に一致和合する有様となり、之を最初にも申した通り、一
 口にいは互に程好く交て人をそらさぬ行ひといふので、自分が無我
 無心になりて、他人のいふ通りになるのゆへ、何の造作もなく世界中の
 千億萬人とも一致することか出来、例せば水は方圓の器に順ふと

いふ如く如何なる清淨なる者にも如何ある汚穢なるものにも一致し
 て使用されなから、其使用者に依て淨穢の差別は出来ても、水の本性の
 更に差はず、時と處と人とを待て、清淨の自性を現すことである、甞に自
 性の清淨を現すばかりでなく、他の不淨すら清淨なら令むる働を
 備て居ります、甞此働を供て居るばかりではなく、他を清淨ならしめた
 りとて自ら誇る形も見せず、恩にさせる心も現はさず、無分別にして無
 心である、之を水魚の交りとも申します、依て人の水の如き心を持つへ
 しとは、佛の教へたまふ所にして、同地水火風虚空無分別で、なんとなら
 うとも、どうせられても、更に氣にかけず、心にとめずして、平氣に此世を
 渡れといふのであります、一切萬有の本性は、皆ち此有様に於て存在す
 るゆへ、人も此法性の儘の有様に於て存在すべしといふことで、之を法
 性に隨順して、法本に背かずといふのである、之が佛教の道徳標準であ

ります。
 去りながら、本當に人をそらすまいといふには、口ばかり程が善くても腹の中が程善くなくては、直に人がそれて仕舞ふゆへ、一口にいへば、人をそらすぬとか、公平無私とか、虚心平氣とか申せども、之を實際に行ふに、自分が正直で清浄で温良で敬儉で高尚で、仁義忠孝、悌信友和、剛氣、仆訥勇氣、決斷、愛敬、柔輦等の修身道德の教を守て、心底より他人と一致和合して居らねば、終つて、皮がはげて、人は皆なぞれて仕舞ひので、あゝ、そこでケ様にいへ、道德上の教も、佛教儒教其外日本西洋の教な、逐一覺ても居られぬ程、澤山の教もあることなれど、それを一々覺て居らねばならぬことは、唯自分が無我無心になりて、平等心に住し、柔輦心となりて、水の如く他に一致和合するばかりにて、徳義上の諸徳は皆な守られる様になるので、之が互に程善く交て人をそらすぬので

あります。

併しながら右の如く云は、自ら謹む方ばかりにして、(消極的なり)受け方になりて、我思と無にする話なれば、更に我思を打出して、(積極的あり)之より彼へ働かせて、自ら動く方のことは、少もなく、人は年中無我無心にして、馬鹿同様の日暮を爲せといふ話になり、また世の中、多數の者は馬鹿にして、智者は少數なるか、其多數の馬鹿に一致して、少數の智者に分離する様を話になりはせずやといふ、不審もあるべしといへども、決して然らず、水は他の不浄を洗ひながら、水の清浄性を汚さぬので、自ら水の清浄性を汚さぬのみならず、他の不浄を洗ふのである、併し水の我は清浄性なれば、不浄の物を洗はずといは、水の功能はなくなる、夫故水、他の多數の不浄に一致して、其不浄を洗ひながら、水の浄性を失はず、他をして、反て水の清浄なるが如くならしむるので、之れ即ち水よ

く石を穿つといふことである。自ら無我無心になれば、世人の和合一致を得られる。世人の和合一致を得られる様にあれば、自ら思ふ事が世人の思と一致する様になる。さすれば自ら思ふ事を實地に爲しても、その爲すことがすべて他人と一致して行はるる様になる。之が即ち儒教に所謂知らず識らず帝の則りに順ふ譯である。又意の欲する所に順て則りを越ぬざる譯であります。

例は學者が學說を弘め、政治家や事務家が國法や世務を行ふにも、商家や工農家が賣買ををし、技術を發表するにも、世人の一致を得ざれば叶はぬことなり。又金を儲けるにも他人の一致を得て、他人にも儲けさせて自分も儲ける様にせざれば、一人で儲かるものではない。然らざれば正當の金儲ではないのである。世に善人にして貧乏なるものあるは如何といふ不審あれども、其人の夫れ程に金を求めぬとか、求め方に

就て智慧かないとか、氣が長いとか、遠慮過るとか、氣がきかぬとか、不器用だとか、了簡が狭ひとか、卑屈じやとか、一こくじやとか、自分には知らずとも高慢じやとか、氣が短くてをこりつばいとか、分限を知らぬとか、なんどかいふ善惡の中でいへば惡の方なり、一致不一致でいへば、外の事い一から十まで結構に一致の出来る人なれども、之ればかりはどても彼人には一致の出来ぬ所じやといふ、大なる欠け目のある人に相違ない、去りながら天性不運などいふ人もありて、天災地變、火難病難に遇ひ何程智慧慈悲方便をめぐらしても、浮むことのならぬ人もありて、之い全く前生の惡業の報ひ、即ち業力不思議なりとあきらめねばならぬ。こどもあれども、夫程のことではなくして、通例にして居て善人にして金と求めながら貧乏するといふ人あらば、其人は必ず不一致なる惡の性を多少備て居る人と申さねばならぬと思ひます。貧富ばかりではない。學

者政治家なほも他人に嫌はるゝならば善人に見えても悪人なりといはねばならぬ。そののみならず又た自ら思ふと爲す行ふとが皆な馬鹿の眞似をして多數に壓制せられよといふことではない。世人の多數にも自分の様な平等無我な廣い心を持たたいの思ひで和合一致させるのであります。之が聖人賢人佛菩薩神々の行ひである。そこでそうさせようとするには自ら山の中へはいりて、隠者となり終りても仕方がない、(自ら自分斗りを證るには隠者となるも可なれども證り終れぬ出て来て衆生濟度せぬの役にいたぬ)依て佛の愚者にも智者にも男女老少善惡のどんな者にも一致しながら志は高尚にして少も變せず自ら變せずして他を變せしめ以て他をも高尚ならしむるのである。之か佛の佛たる所であります。茲が佛教の道德論の基礎となる所であります。

そこで如此の地位に達したる者にして、又けをきかせて過去未來現在の三世に互り幅をきかせて東西南北四維上下に届き、一切善惡の人非人畜生の心にまでも一致和合して自ら平等同体無我無心となりて日暮をなし程善く世間に交て、互に互をそらさぬ様なる世渡りを爲し得らるゝ様になれば、之を佛教にては道德佛と名くるのであります。古人の語に、道無心にして人に合ひ、人無心にして道合ふとあり、又迷ふ時は、人法を逐ひ、悟り罷ぬれば、法人に由る、とあるは、此事である。道も法も無心にして證りたる無分別の自ら相手の善惡貴賤男女等に氣も附かざるに至りたり、此人によるのであり、升唯此人によりて道は行われ法は傳はるのである。人自ら法を逐ひ、又有心にして道を守らんとするも叶はざることである。蓋し所謂知らず識らず法にかなひ則りに順ふ譯ならざるが故である。併し又此道此法は求めざれば得られざる譯で

あり行いざれい現いれざる譯である、
 そこて終りに臨て今一つ不審の殘てあるといふは、人は一致和合を目的とせねばならぬといふ話は一往最もなれども、それいせねばならぬといふこととてありて、知らず識らず目的として居ることではないのである人の知らず識らず目的として居ることは、寧ろ和合一致に反對する差別分離といふことであるといふ不審なるが、之は一部を知て全部を知らぬゆへ起る所の不審である、なるほど人の差別分離を目的とする様に見ゆる所もあれども、それ一人々々に、他人よりも、もそつと廣く、もそつと多く、もそつと堅く、一致和合したいといふ方から差別分離するので、之の初に所謂一致の爲の争である、例せば宗教道德政治法律斗りが一致の爲の學術にあらす、學術のあり丈は、皆な一致統合の爲めてある歟、或い便利交通の爲ならざるいないのである、其中に彼より

は之が廣く便利と益すと歟、之よりは彼が多くを統合するとかいふことがあるのである、加之世界にありとあらゆる萬有生物動物も、皆な一致を目的として居るのである。

元來萬有は存在を目的とするものと假定して、各々議論する事である存在せざるものとすれい、論すべき事もなく、議すべき物もなく、言ふべき必用もなきことである、萬有は已に存在を目的とするものとすれば、生物は生て居るが目的にして、生て居らざれば生物でないものである、生物は已に生て居るを目的とするものとすれい、動物は生て動て居るが目的である、生て動かざれば動物ではないのである、況して動物中の最靈なる人間に於てい、生て動て居ると目的とするものと預定せねばならぬのである、已に生て動て居ると人間の目的とすれば、其生て居る方法と動く方法を考へねばならぬのである、古人も思慮あるが故に人

といふと申されたるか如く其生て居る方法と動く方法とは之を如何かせい可なるや茲が思慮を運さぬならぬ所てある、そこで第一に考へぬはならぬのは、人は何を着、何と喰ひ何處に住で生て居るやといふことで、此陸地に住はぬはならずとすれば、土地の必用あり、有形物を食せぬならぬものとすれば、植物等の必用あり、流動体を飲まぬはならぬものとすれば、水の必用あり、寒を恐るゝものとすれば、火の必用あり、熱を恐るゝものとすれば、風の必用あり、身を入るへき所を要すれば、空の必用あり、之を思慮するものとすれば、識の必用あり、管に地水火風空識のみならず、衣服家屋を以て風雨寒暑をしのぐの必用あり、此外百般の事物必用あればこそ存在するなれ、たとひ一草一木一虫一鳥一微塵一土石にもせよ、必用ならざるものなく、萬物の爲に互に必用なるものである、加之人間の人間の爲に互に必用にして、士農工商互に

互の爲に必用なるもので、互に互の一を欠かば、世界の萬物互に存在すること能はざる譯である、然れば互に互を助けぬはならぬ譯である、互に互を助けるには、互に互と一致和合せねばならぬことである、互に一致和合するには、銘々自ら無我無心の平等柔順心にならねばならぬのである。

昔も今も刑罰に依て人を殺し、又戦争で人を殺すか爲に自ら打死するものと賞讃するは如何といふに、之か即ち右の議論を證據立てる一材料にして、之を生すか爲に殺し、殺すが爲に死する譯で、その殺すの、社會の多數人民の和合一致を破るゆへ殺すのである、社會の多數人民を生かすか爲に死するのである、さすれば人の生て動くが目的で、生て動くには和合一致せぬはならぬといふことい分る、夫れのみならず、和合一致すればこそ生て動かれるので、和合一致しなければ、生て居られも

せす動かれもせぬといふことが分ることである。
 又体を動かす乎心を動かす乎せぬならぬのが人間でありて心を動かすもの、その心を動かすので他人の体を動かすのであるが、免に角なにか動かさぬ、生ては居られぬゆへ、何も動かさぬものを遊民として他人も誇り自分も恐れるは當り前である。動けぬ他人と關係して一致せぬはならず、又遊民で居れば尙更他と一致せぬ、食物も衣服も住居も得られぬ譯である。
 なほまた遊む仕事にばかりかゝり果てて世の爲まならざるものを遊民として誘るのでいおるけれども、併し芝居角力淨瑠璃などの類、遊藝を以て他人を樂ましめ、他人をして樂みたいか爲に動かせる方便となるゆへ、遊藝は遊びながら自ら動て他を動かせる譯にあるのである。夫れ斗りていなひ他人をして遊藝の方で彼れと之れとを一致させる

様なる働をなすのである。
 右の次第なれば

人は互に程善く交て

人をそらすなかれ

といふ、無我平等和合一致論がいよいよ善惡の標準、徳道の手本人の行の目安なりといふことが、明了になつた様なれば、之に疑を懐くものはあるまじと思へども、今一つ萬物はのこらず、此平等一致で生じ起るものであるといふ、因縁和合の有様を知らぬ大に明白になるであろうと思ひます、佛教では之を六因四縁の和合といひ、西洋てハコース(元因)ナ
 一、コムスタンス(事情)の一致といふことで、西洋の元素でいへば六十五元素、佛教の小乗教でいへば七十五法、大乘教でいへば百法の和合一致を得れ、萬物となり、此和合一致が解ければ、元の野原なりけりとい

ふやうになるのである。寺田が此一席の演説をするにも、降誕會といふ事と此席と、此時と、此聞く人と、此自身と、此自身の無病なると、此自身のふつゝかなからも考と、不辨ながらも此口が動かされて、此聲が出るといふこと、此外種々無量の因縁が和合一致せぬ、演説の出来ぬ、又此福壽の命あるは体と心と一致して体の分子と分子とが和合し心の調子と調子とか一致して体と食物とか和合する等種々無量の和合一致がなくは、生て動てしやべることすらぬのである。

され、和合一致は、天地萬物の本源にして、其和合一致となす爲に、天地萬物の本性が、本性の儘の無我平等を現はして呉れぬはならぬのであります。

依て結局、人も互に程善く交て、人をそらすまじとすれ、自分よりいへは無我心になり、他人に對すれば和合心にならぬはならぬ譯であります。

す、先づ此演説は之れまでといたします。

近々善惡標準と刊行するに就て因みに附記し置くことあり善惡の標準の東西洋の學者甲論乙駁恰かも紛々たる亂絲の如く之を議し之を論するも未だ萬古不易の定説あらずして世人の常に迷ふ所なれば拙僧十有餘年來佛教より其一定の説と出さんとを企圖せしも寺に火災の難あり身に疾病の煩あり或は佛教の衰頽せんとするに當て東奔西走し筆硯を弄ぶの好機なく漸く昨春より間を偷み其草稿に着手し昨秋九月辛くも脱稿せり然れども拙僧固より學識に乏しく才智に乏しく資財に乏しく時間に乏しくして自ら満足せずと雖も幸に師友に富めるを以て爾來拙著を大内青巒織田得能村上專精小栗栖香頂清野勉井上哲二郎三宅雄二郎南條文雄等諸師友に廻はして一讀を煩はしたり然れども師友は此外屈指に違わらず故に

到底寫本を以て此幾多の諸師友に一讀を請ふこと能はず依て己むを得ず粗末なる活字に附し三百部程を諸師友に頒たんとするに際し哲學書院其外に數百部刷行せんとを請ふ故に之を承諾して一面識なき人々よりも教を垂れられんことを望むなり尙ほ又拙僧は今後此善惡標準を實際に應用するため「德義の實行」なるもの四編を著さんと欲す四編は客觀的の方に於て信心歡喜編王法仁義編主觀的の方に於て止觀淨心編戒律潔身編なり之れも先だつに「善惡の標準」を著はせるなれば善惡の標準。と。德義の實行。とにて佛教道德論なる者を完成せんと欲する企望なり是れ亦諸師友及び讀者諸君の批評と煩ハすことあるべし

明治廿六年四月二十日印刷

同 年四月廿



著作者

東京本郷區駒込蓬萊町廿二番地

寺 田 福 壽

發行者

東京本郷區本郷六丁目五番地

井 上 圓 成

發行所

東京本郷區本郷六丁目五番地

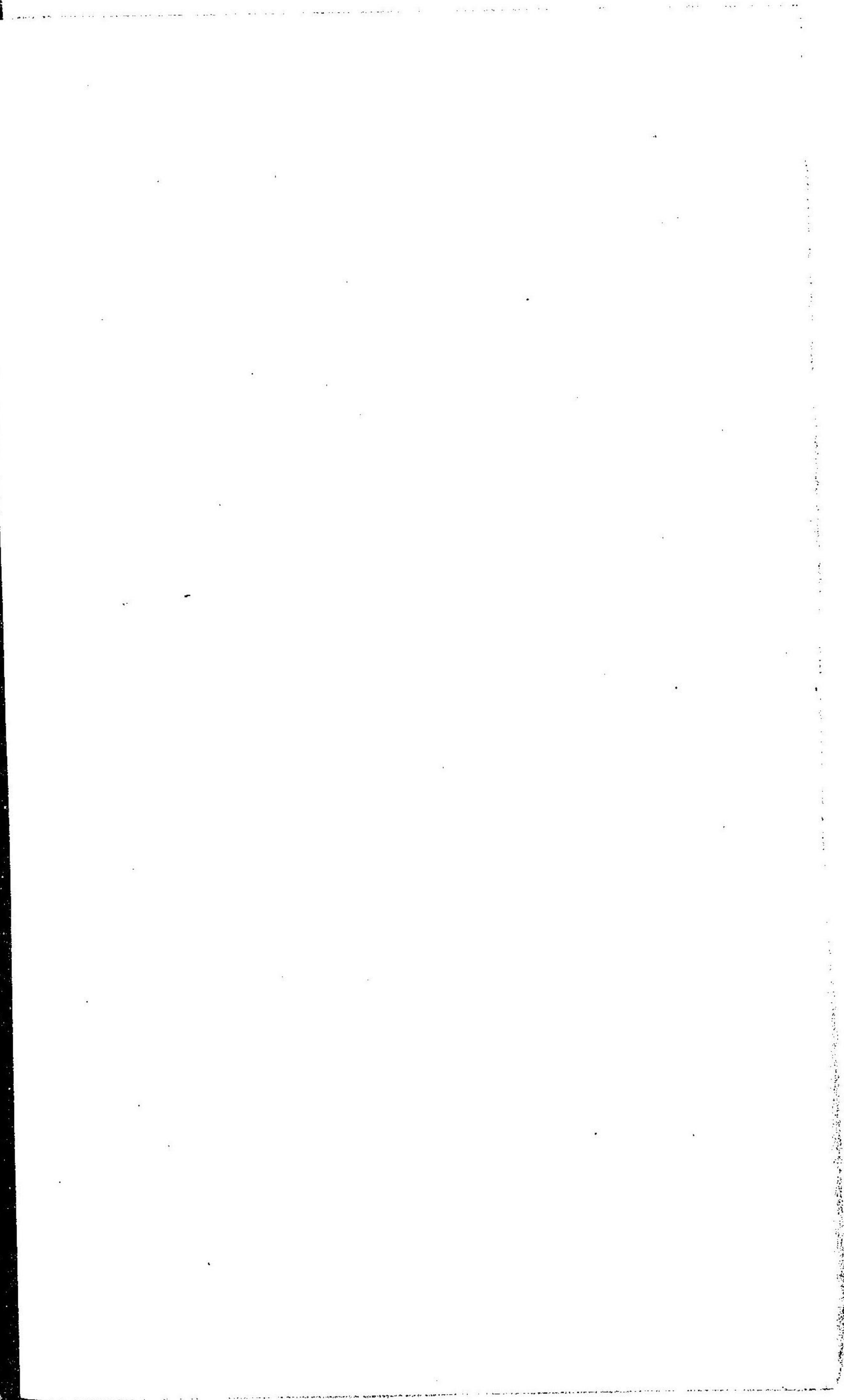
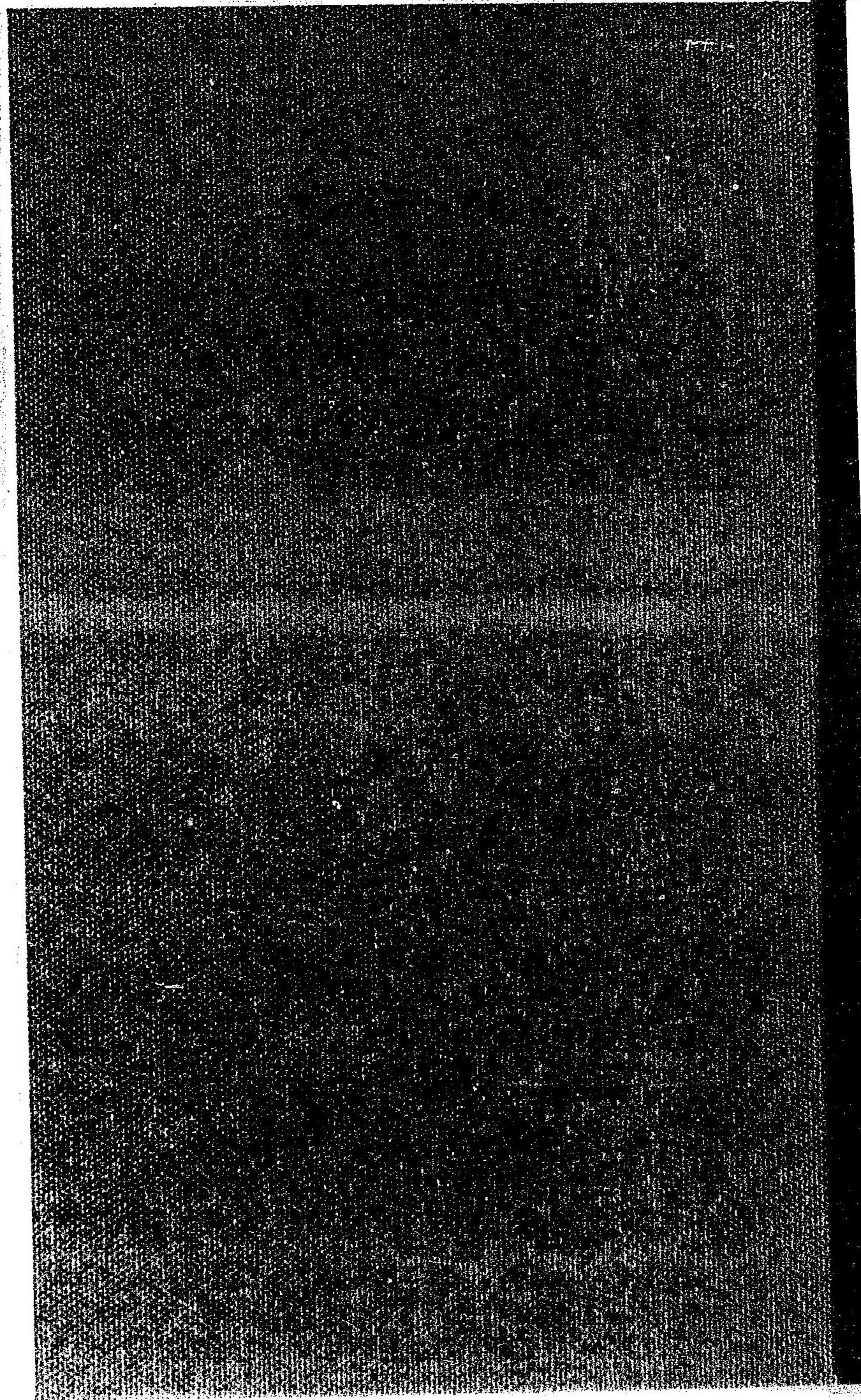
哲 學 書 院

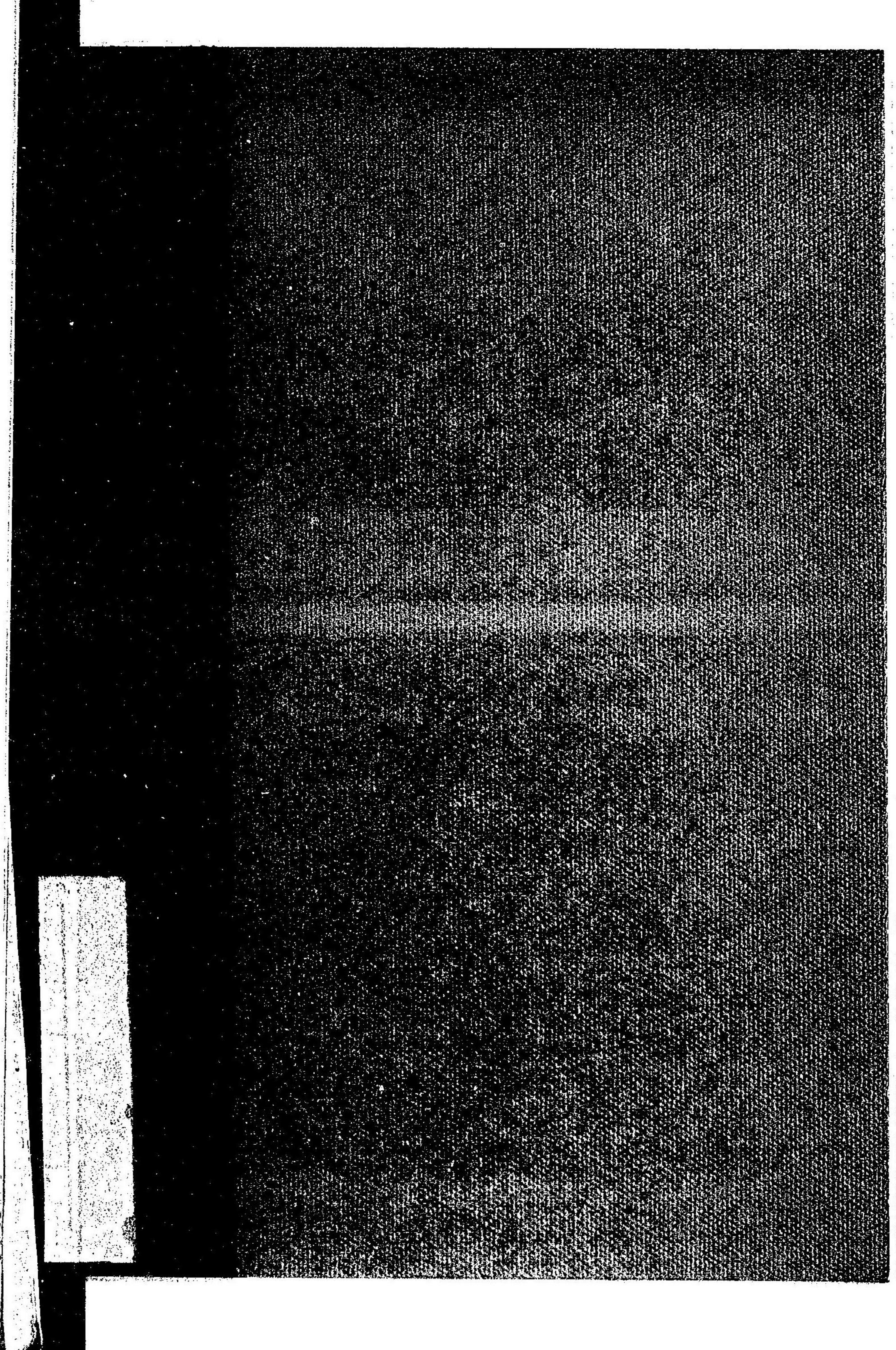
東京京橋區和泉町一番地

印刷人

北澤 久 次 郎

17-16





特 50

229

人生の目的

国立国会図書館

010607-000-6

特50-229

人生の目的

寺田 福寿/述

M26

AAE-2081



